

古文書へのいざない

●和書「白石城材木其外下賜に付太政官達書写」
明治4年(1871)1月

明治政府の最高機関である太政官より仙台藩あての通達。片倉家中の北海道開拓の進展のため、白石城の材木などを下賜し、その売却益をもって開拓費用に充てることを指示した通達の写し。明治2年(1869)9月に幌別郡(現在の北海道登別市)の支配が決まっていた片倉家ではあったが、当地の厳しい環境や費用の問題から、このとき未だ多くの家臣が白石に留まっているなど、思うような進展を見せられないでいた。



●和書「白石片倉家臣據旗記」 江戸時代後期
片倉家中の旗指物が彩色で描かれている「片倉家中旗指物図鑑」。成立はその内容から幕末と思われる。片倉家の家紋や馬駿のほか、豊田秀吉から片倉小十郎景綱が拝領した片倉家関連の軍艦小鷹丸、家臣団の旗指物などが描かれている。



●絵図「奥州白石城図」 江戸時代後期

城下は、簡略化された表現が用いられているが、白石川から引き入れられた水がどのように白石城下を巡っていたのかなどをみることができる。また、城周囲の土手、堀の幅や高さ、深さなどについて記載されている。白石城の絵図はたびたび描かれ、描かれた時期によってその姿が少しずつ違っている。 ※図書館には常時複製を展示。



●和書「片倉御代々記附録」
(刊行年月不詳)

片倉家の正史「片倉代々記」のうち、主に「二代重長譜」の一部について家臣の武藤弘毅が筆写したもの。この箇所については、片倉家に残された「片倉代々記」では欠本となっており、「白石市史」に収録する際にはこの資料が底本とされた。鬼小十郎と言われた重長の活躍を伝える大変貴重な記録である。

「知」の蔵

白石市図書館は、大正3年(1914)に明治天皇の御聖徳を記念する永久の事業として白石第一尋常高等小学校(現在の白石第一小学校)内に設置されたのが始まり。古い歴史が示す通り、他館には例をみない江戸・明治期の古文書(※)が戦禍や災害などから大切に守られ、今日まで保存されている。

図書館では、古文書として和書約1,500冊、漢籍約700冊、そのほかにも多数の貴重本などを所蔵している。書籍類にとどまらない幅広い分野の書物や文物などを収集し、博物館や資料館のない白石にあって、「知」の蔵としての役割を担ってきた。

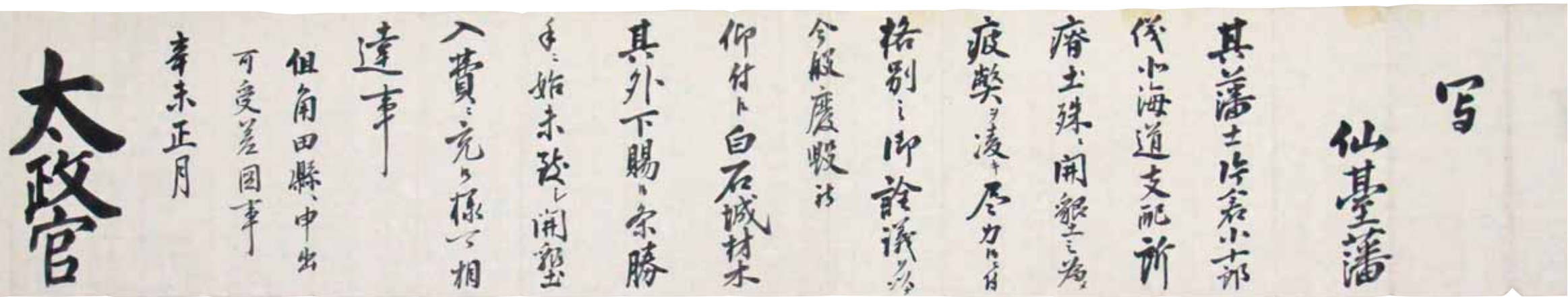
歴史を刻み、私たちの暮らしや文化の成り立ちを記した「重要な歴史遺産」である貴重な資料は、城下町の伝統を引き継ぐ私たちの宝として、これからも市民の皆さんとともに守り続けていかなければならない。

※古文書とは、広義の意味として古い書類すべてをさし、文書のほか、記録や系図類、時には古書(和書・漢籍など)を含む。和書は日本人が、漢籍は中国人が、著作編纂した書物のことである。

「知」の発信基地

図書館は、市民の皆さんの生涯学習を推進するため、歴史のまち白石ならではの取り組みや学びの場を提供している。

図書館2階にある「郷土資料室」は、平成16年、市制施行50周年を機に、郷土資料(白石市や宮城県、東北に関する本)をさらに充実。片倉小十郎に関する本はもちろん、白石市の人が書いた本や宮城県の人が書いた本、市町村史(市や町の歴史・特産物・遺跡などを掲載)を取りそろえている。また、郷土資料だけではなく、白石城や和紙、甲冑など、白石市に関係のある本、さらに、行政資料(議会録や予算書、広報しろいしなど)も取りそろえている。白石市の歴史や史跡、民話、産業など、調べたいことはここに来れば解決!「歴史のまち白石のことを調べたい」という市民の皆さんのための場所である。



●和書「片倉氏系図」
(刊行年月不詳)

冒頭には「藤原姓片倉氏系図」とある。片倉小十郎景綱の父景重の代から始まり、明治時代に男爵となった13代景光までの系図。朱書きによる書き込みが一部に見られる。



●和書「安産仙翁邦言教諭」
明治2年(1869)

表題には「苦痛起信 安産仙翁邦言教諭」(はらのいたみがめをさますおほこなしだるまのなまりおつげ)とあり、岩代国刈田郡平澤村(現在の蔵王町平沢)の五十嵐健蔵妻きしほか2名が施主となり明治2年(1869)に刊行。出産にかかる経過と注意事項などが、表題にある通り独特の方言(なまり)で記されている。



●和書「越河御境目べり記被仰渡候御留」 正徳5年(1715)

越河は奥州街道沿いにある仙台藩南の国境。ここには番所が置かれ、人や物の出入りを厳しく取り締まっていた。正徳5年(1715)7月13日、仙台藩庁よりときの白石城主片倉村休に対し「番所の警備が緩みがちである」との警告が出されており、本書からはそれをうけて8月9日付で片倉家の家臣5名が「御境メリ」に任命されるなどの対応が見られる。当時の国境警備の実情が伺える興味深い資料である。



●和書「片倉御家譜抜書」
文政3年(1820)

表紙には「片倉御家譜抜書 武具 馬具調」とあり、片倉家の正史「片倉代々記」からの抜き書きほか、武具の書き上げ、片倉家の由緒などさまざまな情報が記録されている。筆跡から一人ではなく数人の手によって書かれたものと分かる。

●和書「翁問答」
慶安4年(1651)

江戸時代前期の儒学者中江藤樹の著書。図書館所蔵のものは、上巻(本・末)、下巻(本・末・末之末)の全5冊である。天君と鉢充の師弟による問答形式で、平易な和文で書かれた教訓書。「下巻末之末」の巻末に「慶安四曆初春野田庄右衛門開板」とある。図書館所蔵資料の中で、最も古いものである。